FQ JAPAN10月号増刊
[アースジャーナル]

サステナブルな「食」と「エネルギー」

EARTH JOURNAL

Solar Sharing

まるごとわかる!
ソーラーシェアリング入門

vol. 05
2017 AUTUMN
¥500

農業とエネルギー

農家1000人のイノベーション

全国からの実践レポート

ソーラーシェアリング×地方創生

ゼロから始める導入フロー

農業収入に売電収入をプラス!
畑の上で太陽光発電のすすめ

基礎知識から設置の手順まで
ソーラーシェアリングQ&A

CHAPTER 02

実践レポート

ソーラーシェアリングのいまがわかる！

ソーラーシェアリングはいま、どんなところで、どんなふうに活用されているのでしょうか？ 全国の農家さんたちを取材したら、農業や地域を豊かにする、思わぬ効果と活用方法が見えてきました。

photo: Yukiko Soda (p16-23, p26-28), Kazunobu Kataoka (p24-25, p30-36, p38-39) text: Yukiko Soda (p16-23, p26-28), Kimimori Hiromachi (p24-25) Masaki Takahashi (p30-36, p38-39)

1.市民農園にて。右から西谷ソーラーシェアリング協会の古家義高さん、株式会社宝塚すみれ発電の井上保子さん、新規就農者の柴田邦雄さん。 2.子供の笑顔があふれるソーラーシェアリング。これぞ、未来の理想的な農園の形？ 3.市民農園のソーラーシェアリングでは、サツマイモのみを栽培。 4.ソーラーシェアリングの目の前は、サツマイモ以外も自由に栽培を楽しめる約933㎡の市民農園ゾーンが広がる。 5.サツマイモの収穫には、地域の大学生達も参加し、おおいに盛り上がるそう。

REPORT 01

兵庫県宝塚市

宝塚すみれ発電

地産地消をもっと楽しむ場所へ 市民発！ ソーラーシェアリングの里

「すべては安心安全な食と暮らしのため」。一人の勇壮な女性が目指したのは、クリーンエネルギーを生み出す市民発電所。その熱意が伝染し、この町はソーラーシェアリングの里になりつつある。

笑顔あふれる市民農園から新規就農者の無料農地まで

兵庫県宝塚市の北部、西谷地区。のどかな里山風景が広がるこの地域には、6基のソーラーシェアリングが稼働している。ここ約2年の間に造成されたものだ。その発端には、一人の一般市民の存在があった。非営利型の市民発電所をうたう「株式会社宝塚すみれ発電」の代表取締役、井上保子さんである。

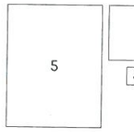
遡ること、約36年前。スリーマイル島原子力発電事故を機に任意団体「原発の危険性を考える宝塚の会」が発足。井上さんはそこで反原発の市民運動に携わるが、2011年、急展開を迎える。東日本大震災と共に恐れていた原発事故が発生、自然エネルギーの普及が急務だとして、「新エネルギーをすすめる宝塚の会」（その後NPO法人化）を立ち上げたのだ。同時に、行政も巻き込みながら奮闘する日々が始まる。2013年には、太陽光発電システムを活用し、市民が出資してDIYで作る「市民発電所第1号」を稼働。また、非営利という志はそのままに「株式会社宝塚すみれ発電」として法人化も実現した。その後もおよそ1年間隔で第2号、第3号の市民

DATA

宝塚すみれ発電所 第4号

場所	兵庫県宝塚市
設備容量	46.8kW
土地面積	900㎡
導入年月日	2016年4月12日
導入費用	約1700万円
年間の売電収入	約170万円
パネルの下で育てている作物	サツマイモ

何もなかった土地にソーラーシェアリングができたことで、人も集まり、地域経済の活性効果を感じています。



1&2.全国から見学希望者が訪れる。 3.ソーラーシェアリング設備は宝塚すみれ発電所が、市民農園は古家さんが経営する「KOYOSI農園」が管理運営。 4.新規就農者の柴田さんが作ったトマト。(写真提供:柴田邦雄さん) 5.柴田さんは、「パネルの影響は感じない。日陰があることで作業もしやすい」と話す。

発電所を完成させ、2016年4月には、第4号として待望のソーラーシェアリングを稼働させた。

「農業も地域も活性化できると注目していました。多くの人に農業とエネルギーに興味を持って欲しいと思って、市民農園という形にしようと決めました」。

市民農園は全部で36区画。約900㎡の畑に3mの高さで架台を組み、汎用タイプの太陽光パネルを180枚設置。台風の影響も考え、仰角はフラットに、4本の柱を支える杭は地中1・4mまで打ち込んだ。行政の指導により、収穫量の管理上、品目を統一する必要があり、農作物は多くの人が好むサツマイモをセレクト。2年目の今年度も生育は順調だという。

残る5基のソーラーシェアリングは、西谷地区の農家がそれぞれ自己資金で設置・運営している。

「西谷ソーラーシェアリング協会」の共同代表で、市民農園のオーナーでもある古家義高さんは、井上さんに誘われて2015年8月よりソーラーシェアリングをスタート。売電収入を得ながら、ソーラーパネルの下の農地は新規就農者に無料で貸し出しているという。

「設置には営農の継続が条件。農作業がツラい高齢者は、新規就農を目指す若者に提供すれば、まさにWin-Winです。仲間を増やして、西谷地区をソーラーシェアリングの里にしたい」と意気込む。

また、新規就農者が作る有機野菜は「みずみずしく、味が濃い」と評判だそうで、大手百貨店などとも取引されているという。

「ソーラーシェアリングによる地域経済の活性効果は大きい。今まで何もなかった地域に6基が立ち、発電して、新しい住人も増えているんですから」と、井上さん。

その熱意は、行政にも波及していく。嘆願書の提出や話し合いを経て、体制が少しずつ変化。宝塚市に「新エネルギー推進課」が新設され、基本条例を制定。さらに兵庫県では、地域主導型再生可能エネルギー導入促進事業が創設され、地域団体に対し技術的支援を行なっているほか、現在では3000万円まで無利子の貸付を行っている。

「自治体によって対応は異なると思いますが、諦めないで交渉してほしい。『こんな例がある』って、ここの事例を伝えてもらえたら。ノウハウを聞かれれば私たちは惜しみなくお教えしますよ。全国に広まってほしいですから」。

市民主導型のエネルギー革命は、これからも続いていく。